

《眼科臨床エキスパート》 緑内障治療のアップデート

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信 シリーズ編集 杉山和久, 谷原秀信 編

400 ページに及ぶ緑内障治療に関する本が出版されたと知り、早速手にした。

フローチャートと表が多く使用され、写真、図が豊富である。Web サイトを通して動画を見ることもできる。商品名を記した薬物治療の実例が示されているなど、臨床の第一線を意識した構成である。要となる箇所は、著者の単なる印象ではなく文献を引用した記述であり、説得力がある。「臨床の現場で役立つ」と「根拠が明らかな記述」を重視した編集者のコンセプトを感じる。

章ごとに見ると、「総説」では緑内障治療に当たっての基本姿勢が述べられている。治療の目的、治療開始前の準備、薬物療法での注意点、レーザー治療や手術療法の適応などが、膨大な過去の研究を咀嚼してわかりやすく解説してある。目標眼圧の決定時に考慮すべき要因、高眼圧症や緑内障の治療開始のタイミングなど参考になることが多い。

第2章「病型別治療」では、各病型で微妙に異なる薬物療法、手術療法、そして予後が記載してある。原発開放隅角緑内障の薬物治療から手術へ切り替えのタイミング、原発閉塞隅角緑内障、原発閉塞隅角症の改訂された分類とその治療はわかりやすい。

第3章「薬物療法の実際」では、緑内障治療薬の紹介に加え、点眼薬の効果判定の詳細、多剤併用時の組み合わせについて、詳しく説明されている。ROCK 阻害薬も含まれている。 β 遮断薬の効果減弱時の対応やアドヒアランスが不良な時の対処法は、役立つ手法である。前の「総説」「病型別治療」とともに、緑内障を専門としない眼科医にもぜひ読んで欲しい章である。

第4章「レーザー治療」では、レーザー線維柱帯形成術の適応、手技、治療成績などが動画付きで詳細に記載されており、本術式導入時には必読である。また、迷うことが多いレーザー虹彩切開術の適応が、わかりやすい表で示されている。

上記の4章に続き、第5章「トラベクトミー」、

第6章「チューブシャント手術」、第7章「トラベクトミーと流出路再建術」と、手術の術式が独立した章を構成し、全体の半分以上のページを占める。編集者の緑内障手術に対する意気込みを感じる。「手術テクニックのコツと落とし穴」や「術中・術後のトラブルシューティング」の項が設けられ、手術で遭遇するさまざまな場面でのエキスパートのテクニックや工夫が、動画を含め惜しみなく披露されている。例えば、トラベクトミーでは、内眼手術の既往眼に対する対策、強膜弁直上からの房水漏出に対する処置、さらに術後レーザー切糸での切糸の順番や Tenon 嚢が厚い例での切糸のコツなど、細部にわたる。トラベクトミーでは、Schlemm 管が狭い例やプローブ挿入時に早期穿孔した場合の対応、プローブは左右どちらから先に挿入するかなど、参考になる。また、チューブシャント手術では、手術適応から手術手技、周術期の管理、トラブルシューティングが詳しく述べられており、本手術を始めるに当たって目を通すべき章である。

緑内障は、治療に際し考慮すべき要因が多い。点眼薬は多種多様で、確実な手術法がない。さらに、多くは慢性で、消失した視機能は取り返せないと、苦慮することが多い疾患である。しかも、その罹患率は40歳以上で5.8%と高く、眼科臨床医として避けることはできない。そのような疾患と取り組む眼科専門医、専門医指向者にとって、本書は教科書的な書籍と言える。また、スタンダードな治療法がない緑内障診療で、エキスパートのちょっとしたアドバイスが、しばしば好結果につながる。緑内障専門医を目指す医師や経験豊富な緑内障専門医にとっても、さらに上の段階への足がかりとなる書である。

産業医科大名誉教授/田原眼科院長
田原昭彦

B5・頁424 2015年10月
定価：本体17,000円＋税
[ISBN978-4-260-02379-5] 医学書院刊